

NEW



ホルベイン工業株式会社
東京都豊島区東池袋2-18-4
TEL.03(3983)9251
大阪府東大阪市上小阪1-3-20
TEL.06(6723)1554
www.holbein-works.co.jp

油絵具の上に水性の絵具を持ち込むと、必ずひび割れを起こす。このジレンマまで解決してしまつたのがホルベイン「デュオ」。水に溶ける油絵具としてだけではなく、混合技法の可能性をより広げた新しい絵具としても注目されているのだ。仕上げの段階で細部を詰めるときなど、水性なので筆の切れが良く、繊細なマチエールを油絵の上に乗せられ、乾燥の後は本来の油絵具で描いたような画肌に仕上がる。もちろん、溶剤に対するアレルギー問題も一掃した。換気に気を使わずに創作に打ち込める。また新たに顔料から見直した全100色のラインアップも大きな魅力。プロユースという声へ、大胆かつ繊細な解答である。

水で描ける——次世代油絵具
アクアオイルカラー「デュオ」

私は、生まれながらに繊細である。



櫃田伸也

プレスされた風景は
軽やかに変奏される

林 洋子=文

Text by Yoko Hayashi



1968年、東京藝大助手だった頃。中央、黒縁眼鏡姿が櫃田。右端に立っているのは故・榎倉康二、左から2人目は高山登（現在、東京藝大先端芸術表現科教授）



放尿美学入門 1968(新制作協会賞受賞作)
キャンバスにアクリル絵具、油彩 180×180cm 作家蔵

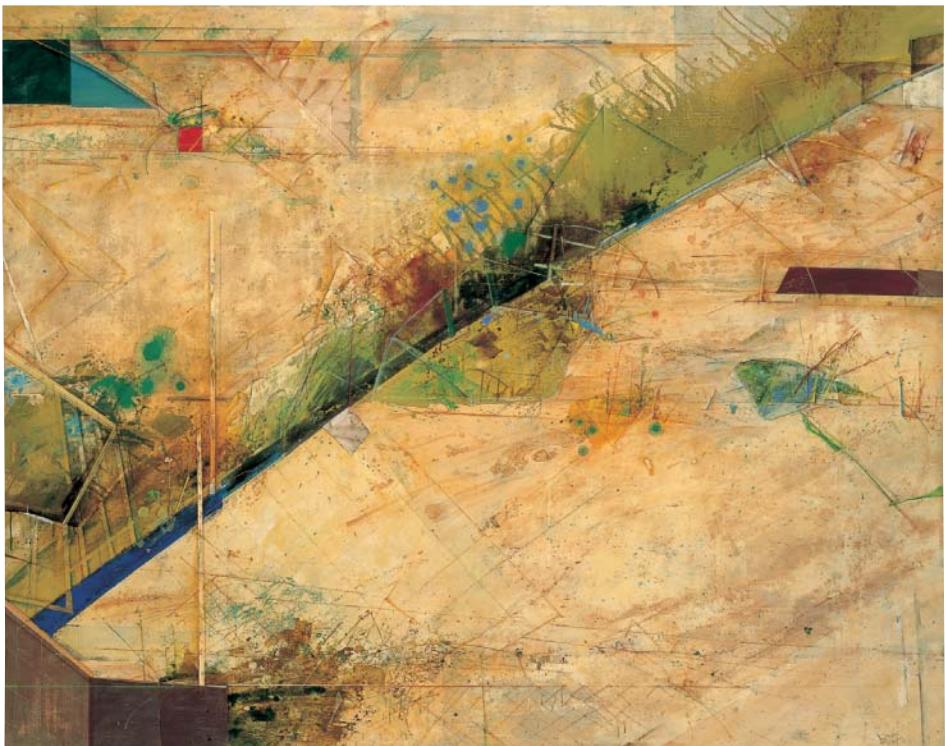
1968

「街の出来事が面白くて、
上野の藝大キャンパスよりも
吉本隆明らが講師を務めていた
『自立学校』に通ったり。
そこでは、
火炎瓶のつくり方のチラシが
配られることもありました」

これまで本連載でインタビューした作家の口から、しばしば「ヒツダ先生」の名が語られてきた。小林孝亘、長谷川繁……ほかにも奈良美智や村瀬恭子など90年代半ば以降の日本の絵画シーンを担う人材が彼のもとから巣立っているのだ。しかし、その画歴にはこれまで触れずじまいだった。東京艺大で教授退任記念展が開かれ、ようやくその機会を得た。

蒲田の、多摩川べりの地域には戦前、軍需工場が集まり、激しく空襲を受けた。バラック建てから復興していく「地べたの出ている東京」が櫃田の原風景にある。美術好きの父に上野へ連れられ、マティス展、ピカソ展、メキシコ美術展などに触れた。そのことが彼の画家としての資質を——それは圧倒的に「見る」創作者であり、チラシや雑誌などの印刷物を「集める」人なのである——決定づけることになる。

中学時代から油絵を描いていた



風景断片 1984 (安井賞受賞作) キャンバスに油彩 181.8×227.3cm 東京国立近代美術館蔵

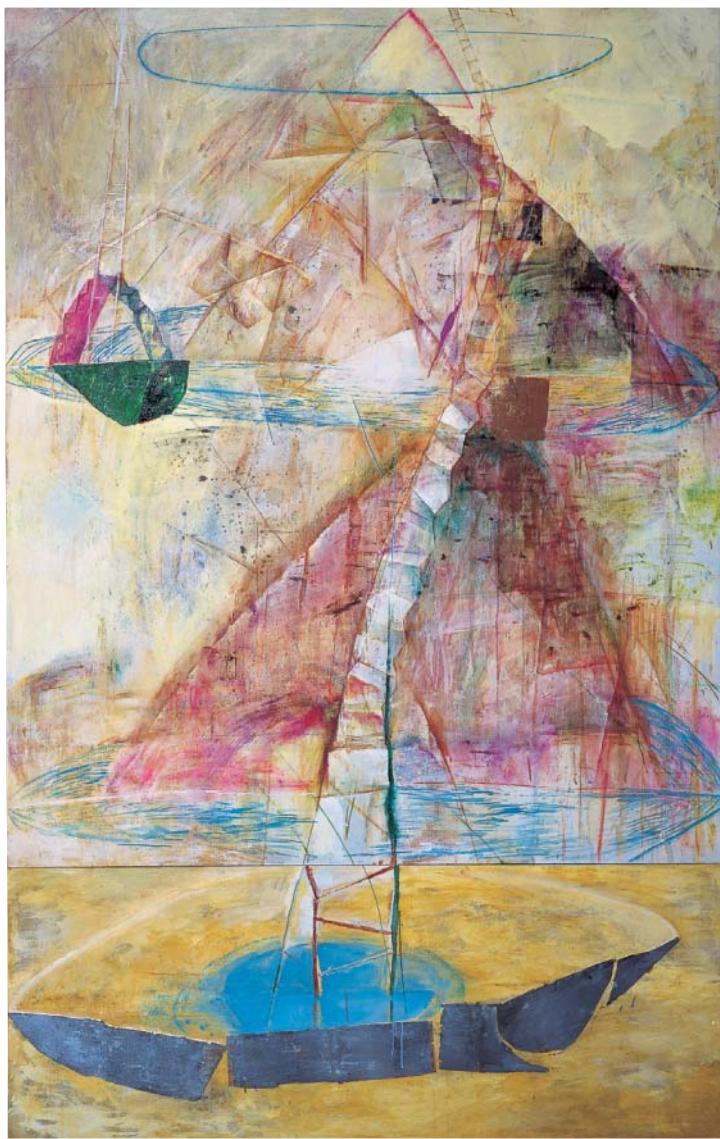
1984

「安井賞への欲を吹っ切ろうと、思い切った斜線を試みたこの作品でその賞を受けることに……」

少年が、東京藝大油画専攻に入學するのは1960年。「絵画に限らず、一気にいろいろなものが面白く」なり、映画に入れ込んだ。読売アンパンやハイレッド・センターなどの動きも知っていたが、「見ること」と「自分の仕事」のズレに懊惱する日々。卒業制作が作品買い上げになったこともあり、とにかく大学院へ進む。小磯良平に師事し、修了後しばらく助手を務めた。やがてテレビ業界に就職したのは、すでに新制作協会に連続入選するなど作家として順調なスタートだったが、社会との関わりは持つておきたかったからだ。直後、藝大を学園紛争の嵐が襲う。30歳近くなつて就職したNHKでは、しかし適性を見出せなかつた。後輩の榎倉康一や高山登らがアートシーンにデビューするのを雑誌などで目にし、30歳の誕生日に辞表を出した。70年代、「絵画」はやりづらい時期を迎えていた。アルバイトをしながら身近な日常

風景を描き始めるが、具象ながら最低限のミニマルな要素の表現を目指した点は、実は「もの派」にも通じるものだ。プロック塀や壁をモチーフとした浅い空間、手で触れるような風景。東京国立博物館で見た酒井抱一『夏秋草図屏風』、リアルタイムで読んだ辻惟雄の本誌連載「奇想の系譜」、NHK美術部時代に接した大道具職人のコンクリート壁のつくり方などが融合して、『触風景』が生まれた。銀箔地を思わせる薄い油性地に、鉛筆によるグリッドが浮かび上がる「壁」。そこをモチーフが枝垂れる。垂直、水平の意識

触風景 1975／1985加筆
キャンバスに油彩 162×180cm 個人蔵



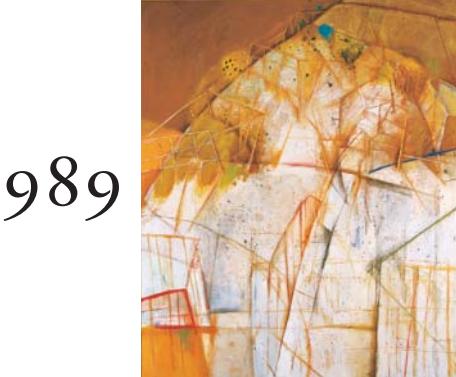
塔 2007 キャンバスに油彩 259×162cm 作家蔵

2007

「変奏とは、自分のからだが変わっていく、
世界が遠のいていくような浮遊感、
あてどなさ、その表現」

1985年、櫃田は『風景断片』で安井賞を受ける。東京ではインスタレーション華やかなりしこの時期、「名古屋にいたことで絵画を描き続けることに集中できたんですね」。以後90年代にかけて、彼の作品は色彩が明るくなり、壁、地面、山などのモチーフが縦横に

1989



1989年に手がけたイメージを展開。『那智滝園』を意識しつつ、その後の加筆により山を積み重ねた絵に発展し、下部に船が浮かぶ水面を加えて完成した

が強く、油絵具のボディーを考え、厚塗りと薄塗りを使い分けた。

1975年、愛知県芸大に職を得て生活の拠点を長久手に移す。古戦場として知られる丘陵に広がるキャンパス周辺で櫃田の印象に残ったのは、なによりも「土の色」。茶褐色の瀬戸の陶土は、それまで

の「壁」を象徴する銀地から、「地

面」を意識した金地へと直接反映された（実際に金箔を使うのではなく、イエロー・オーカーを白でのばした）。周辺の丘陵地での、こぼこ——山のでっぱり、池のへこみにも魅せられ、かたちの連續やジャズのようにひとつフレーズを転がす変奏に関心を持つようになる。「繰り返しリズムをつけ

ることで、面白さを引っ張り出します」。絵画に立体とも平面ともつかないモチーフを登場させることで、奇妙な空間をつくってみた。大学敷地内の彼の自宅は学生たちのたまり場となり、「孵卵器」となった。

1985年、櫃田は『風景断片』



ひつだ・のぶや

1941年東京・大田区生まれ。64年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業。66年同大学院修了後、69年まで非常勤助手を務める。70~71年、NHK美術部にデザイナーとして勤務。75年から愛知県立芸術大学美術学部絵画科油画専攻で教鞭を執り、96~2001年教授。01年、東京藝術大学美術学部絵画科油画研究室教授に転じる。08年度で退任。65年から新制作協会展に出品し、68年まで新作家賞を連続受賞、72年会員に。79~80年、文化庁芸術家在外研修でパリに滞在。85年「安井賞」受賞。90年文部省在外研修でニューヨーク、パリに滞在。主な個展に69年田村画廊(東京)、78年ギャルリーユマニテ(名古屋および東京、83、87、90、93、97、98、04年も)、04年諫訪市美術館(長野)ほか。最近のグループ展に「drawings 考える手」展(名古屋市民ギャラリー矢田、08年11月12日~24日)。08年11月11日~24日、東京藝術大学美術館で退任記念「通り過ぎた風景」展が開かれ、図録が同大出版会から刊行されている(3150円)。詳しくは作家オフィシャルサイト <http://www.nobuyahitsuda.com/>

退任記念展会場の一室で、櫃田が収集した絵本や雑貨を、学生たちが愛知のアトリエから運んできて展示していた。「来るもの拒まず」といった雅量ある物腰、洒脱な受け答え、たまにみせるいたずらっ子のような表情。多くの学生が櫃田を慕うのも頷ける Photo Kenji Morita



「リプレイ」はじめ、独特の浮遊感を見せるようになる。

40年を超える画歴を飾る主要作品が並んだ退任記念展で感じられたのは、作品を売る必要に迫られなかつたという、この画家の僥倖^{ぎょうこう}である。結果として、90年代以降の重要な傾向に、「旧作への加筆」

「旧作の切断(解体)・合体」が生まれた。「上の句と下の句を入れ替えることで、思わぬ面白さが生まれるんです」。旧作のイメージが合体して新作が生まれることもあれば、実際に旧作に手を入れて別作品と組み合わせることもある。複数の画面をつなげる際にも、必ずしもひとつ画面としての統一性——色彩やモチーフのつながりは重視されていない。画家が好んで「通り過ぎた風景」とタイトルを付けるように、つねに画面上のイメージが変奏、変移する可能性を孕んでいる。画家は言う。「風景は生き物のように姿を変えながらゆつたりとそこにある」と。

切断と再構成という、パウル・

クレーにも通じるような、軽やかで自在な制作スタンス。このしなやかさのゆえか、櫃田の作品は不思議に古色、時代の手あかを帶びていない。70年代の旧作が、近作と自然に呼応する。退任展では、あえて編年的な展示は採られず、モチーフや色彩を軸に、ゆるやかに円環を描くように動線がつくりれていたのが心地よかつた。遠景



● はやし・ようこ 「美術史研究・美術評論」
11月18日、東京藝術大学大学美術館にて
取材

この「名伯樂」の作品と人間性を貫くものなのである。